

初等教育教員養成における 教科専門科目（図画工作科）の授業（1）

— 2007年度「初等科図画工作」の実践 —

吉田 貴富・河野 令二・菊屋 吉生・中野 良寿・上原 一明

Lessons of Individual Academic Subject (Arts and Crafts)
in an Elementary School Teacher Training Course (I)
- the practice of “Arts and Crafts for elementary education” in 2007 -

YOSHIDA Takatomi, KOUNO Reiji, KIKUYA Yoshio, NAKANO Yoshihisa, UEHARA Kazuaki
(Received January 15, 2008)

キーワード：教員養成、FD、図画工作、教科教育、美術教育、造形教育

はじめに

近年、教員養成における授業改善は言わば二重の背景によって強く求められていると言える。背景のひとつは、大学における授業実践の質の向上が求められていることである。各大学においてFD活動が活発に行われるようになってきた。もう一つの背景は、教員養成の質が問われているということである。教員の資質と能力が従来以上に厳しく問われる状況の中で、より質の高い教員の養成が学部段階から求められている。

大学における授業改善の手法は、基本的には他の校種と同様である。公開・記録・反省が原則となる。本稿においては、山口大学美術教育講座に所属する教員が共同で担当している学部専門科目の授業の中から初等教育教員養成の教科専門科目の実践を記す。

授業科目名は「初等科図画工作」である。この科目名と基本的な授業形態は数十年間変わっていない。内容については、形態がオムニバス形式であるため、担当者に一任されており、担当者により、また年度により異なっている。

授業の概要：

- 開設期：第3セメスター（2年生前期）
- 開設曜日・開設時限：金曜日9・10時限（16：10～17：40）
- 教室：教育学部11番教室、13番教室、21番教室
- 対象：小学校免許を取得する2年生（選択必修）
- 受講者数（最終受講者数）：A班51名、B班49名、計100名
- 各班とも「立体表現」「平面表現」「鑑賞、美術史」の3分野を経験するように組んである。3つの分野（3名の教員による授業内容・課題）をすべてクリアしなければ単位認定はしない。

■ 担当分野・担当者・担当回数：

A班：【立体】河野（6回）、【平面】吉田（6回）、【鑑賞・美術史】菊屋（2回、A・B合同）

B班：【平面】中野（6回）、【立体】上原（6回）、【鑑賞・美術史】菊屋（2回、A・B合同）

1. 【平面】中野良寿：水彩絵具に慣れるためのテストピースの制作 -水彩絵具を使った風景画の制作のために-

1-1 テストピースについて

毎年、初等科図画工作における絵画の担当時間には、山口大学教育学部の周辺の風景を学生に描かせている。この授業の場合、選択した学生の大半はそれぞれ所属する専攻において美術と関係ない学生が受講するため水彩絵具の使い方に不慣れな学生が多い。結果として、提出された風景画は水彩絵具の特徴である透明感やのびのびとした筆致をうまく生かしてきていないものが多い。特に目立つのは、鉛筆で構図のあたりをとった後、透明水彩の具にもかかわらず、不透明水彩のガッシュや油絵具の扱い方のような要領で絵の具を厚く紙の上に塗り重ねているような例である。この点についての注意は授業の最初に繰り返し説明していることであるのだが学生にとって、頭では理解できても実際の制作の時にあまり生かされていない。このような問題点を念頭において水彩画の初心者のための、水彩絵具のテストピースの制作を考案してみた。

1-2 テストピース制作の実際

1-2-1 ガイド用の升目の作図

まず与えられた画用紙に折り目を入れて、16×8の升目をつくる。これは彩色のときのガイドとなる。この時定規を使って正確に升目を引いてもいいし、折り紙をつくるように紙を折り曲げて升目をつくってもよい。（図1）

1-2-2 寒色と暖色

16×8の升目を左右二領域に等分に分けて、それぞれ寒色と暖色を基本とした色調に塗り分ける。最初、寒色領域には青、群青、紫、青緑の4色をとなりあう升目にならないように塗る。暖色領域には同じような要領で黄、赤、朱、黄緑の4色をとなりあう升目にならないように塗る。ここまでの作業を起点として、二領域の違いに注意しながら空白の升目の部分に彩色してすべての升目を埋めていくというのがこのテストピースのルールである。

1-2-3 塗り方

水彩絵の具の塗り方についてはチューブから出した絵の具をパレットの上で薄く水に溶いて塗るようにする。できれば絵の具を紙の上ののせる前に、透明な水を、筆を使って升目の上に塗り、紙の表面を湿らせておくことが望ましい。これは水彩絵具の透明性をうまく引き出すための方法の一つである。

1-3 テストピースの実例

1-3-1 テストピースの学生作品について

作品 1 は学生作品の中でも一番標準的な作品である。寒色の領域においては全体的に明度を低く設定して青や緑の色が調和するように調整している。暖色の領域においては朱の純色を生かしており、明度の低い赤と茶系統の色を調和させている。

作品 2 は全体的に几帳面な塗り方が印象的である。寒色領域においては青と青緑に加えて、紫の特徴的な使い方が見受けられる。暗色に近い紫とグレーの色を加えた紫をバランスよく配置しており色味を無彩色によって抑制しながら全体のトーンを調和させている。暖色領域においては寒色領域ほどの工夫は見られないものの、黄色とピンク色をとなり合わせに配置したところは寒色領域における傾向性と共通する部分も見られる。

作品 3 は水彩絵具の水分の動きをうまく利用して升目の仕切りに必ずしもとらわれない塗り方をしている。この塗り方は寒色領域で顕著に見受けられ、本来の升目よりも右下方部分でより縮小して塗られている。しかしこの升目の縮小は全体のバランスをみて破綻しない程度のところで抑えられている。さらに寒色領域で全体に明度を低くして寒色の青や青緑の純色を生かす工夫が見受けられる。また、暖色領域においては明度の高い黄色の部分が多いが、明度の低い赤を幾分か配置することにより、明暗のアクセントが生まれるように考えている。

1-4 分析

1-4-1 色について

寒色と暖色に塗り分ける過程で諧調の幅に違いがある。これは個人によってまちまちであり、寒色を好むか暖色を好むかによって違ってくるものと思われる。緑色と紫色が寒色であるのか暖色であるのかという質問がけっこうあったのだが、本来緑色と紫色は中性色であり、このテストピースの制作では、中性色はどちらに使っても良いということにした。

1-4-2 形について

基本的にガイド用の升目に沿って色を塗り分けるため、形に大きな違いはないはずだが、升目と升目の境界の認識の違いによって塗り分けられた個々の升目の形に違いが生じている。

原因としては二つ考えられる。一つは制作者の性格的な要因、もう一つは絵の具の水分量のちがいによっておこる塗りムラによる要因である。前者は作品 3 に見受けられるように二個分の升目を無視して一色で塗っているところや正確に升目に沿って塗っていないため平行四辺形になってしまっている部分など、作者が升目という境界をどのくらい遵守する意思があるかどうかということにかかっている。後者は技法的な要因ともいえるが、水分量の多い絵具を使うと、どうしても滲みが発生することが多い。日本画の技法でいえば“たらし込み”に相当する効果が表れていることになるが、そのせいで升目の形は幾分不規則な形となる。

1-4-3 質感について

作品 2 のように滲みをあまり使わず、紙の表面の肌合いを生かして比較的フラットな塗りをしている学生の作品は色面の細部に大きな変化はないが、全体の印象として清潔感がある。

また、作品 1 や作品 3 のような滲みを効果的に使い、ガイドの升目の形にまで影響を及ぼすような滲みがみられる作品では、水彩絵具そのものの面白さが伝わってくる。塗られた色面の質感は滲みの効果のために、木の皮の表面のようなざらざらとした質感を感じる。

1-4-4 グリッドについて

絵画史における水平、垂直のグリッドの配列については、20世紀初等のキュビズムの時代に流行した幾何学的な絵画や1950年代の抽象表現主義の時代の絵画におけるグリッド配列などがあげられるが、いずれもグリッドとその内部を塗り分けるときに生まれる塗りムラの関係に作者の作為と無作為の間のせめぎ合いの要素を感じることができる。このテストピースにおいてかつての画家と同じ体験ができるわけではないが、升目に沿って水彩絵具の塗りを繰り返すことでグリッドと絵画の関係を考えるきっかけになるかもしれない。

1-5 まとめ

このように単純な手法ではあるが、普段水彩画を描き慣れない初心者が風景画を描く場合、風景を前にして水彩画を描き始める前に、室内でこのような水彩絵具のテストピースを作る経験をするのは、実際の風景を描くときのきわめて重要な経験になるのではないかと思う。運動をするときの準備運動のようなもので、今回はこのテストピースを作ったおかげで何人かは滲みや絵具を薄く重ねてゆくやり方に気づいて風景画を描いていた。さらにこのテストピースを風景画の制作現場におくことで、適切な色合いと絵肌を選ぶことが比較的容易にできた学生もいた。また学生を指導する時に、風景画が完成する以前に、学生の水彩絵具のテストピースの結果を憶えていれば、その学生が、色彩や形、質感の捉え方においてどのような感覚の持ち主か推し量ることができなくもない。このことは学生の隠れた可能性を発見するという点において非常に興味深いことである。

参考文献

- ・ 小山清男 日本図学会編『美の図学』森北出版、1998年
- ・ 永山裕子『水彩入門 透明感を生かして描く』グラフィック社、2003年

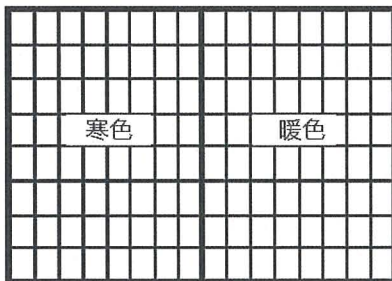
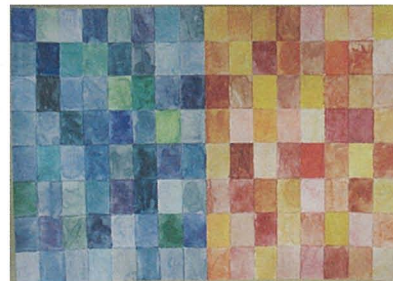
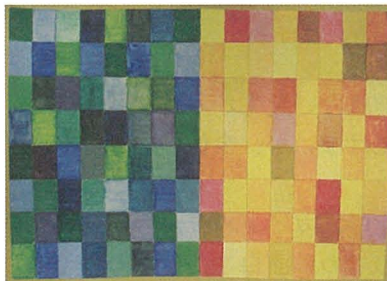


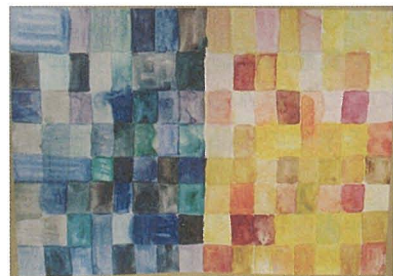
図 1



作品 1



作品 2



作品 3

2. 【平面・インスタレーション・写真・造形遊び】吉田貴富

2-1 第1回授業（'07. 6.1.）

(1) イントロダクション

授業のおよその内容、ルール、予定。

(2) a r tの意味

- ①芸術、美術 ②技術、こつ、要領、術 ③特殊技術、技能 ④人文科学、教養科目
⑤人為、技巧 ⑥狡猾、策略 ⑦不自然さ、作為 等。

(3) 本日の課題

「作品」を3点つくって、それをデジカメで撮影して、送信すること。

(4) 課題遂行のためのキーワード

①インスタレーション Installation art

【解説】1970年代以降一般化した、絵画・彫刻・映像・写真などと並ぶ現代美術における表現手法・ジャンルの一つ。ある特定の室内や屋外など、場所や空間全体を作品として体験させる芸術。★置く・並べる・設置する

②人為・作為

【解説】人が、外界になんらかの造形的なはたらきかけをする行為そのもの
＝アート

③美、造形的な「おもしろさ」（知的な興味をそそられる）

e x. 規則性、非日常性、テーマ性、物語性、メッセージ性

(5) 参考までに

小学校図画工作科の内容として「造形遊び」というものがあるのを知っていますか？

【解説】S52（1977）年版学習指導要領：低学年に登場

H元（1989）年版学習指導要領：中学年に拡大

H10（1998）年版学習指導要領：高学年まで拡充（全学年）

現行学習指導要領本文を確認。

(6) 本日の課題の確認

- 作品をつくって
- それを写真に撮る。
- 写真は1作品につき1枚。作品を3つつくるので、提出写真は3枚

(7) 送信のフォーマット

- 送信先アドレス：takatomi@yamaguchi-u. ac. jp
- 件名：氏名のみ
- 本文：タイトル（任意）

(8) カメラ付携帯電話を持っていない受講生がいることも想定して臨んだが、いなかった。

(9) 注意

- キャンパス内に限る
- 屋内・屋外は問わない
- 破壊行為・殺傷行為は禁ずる

- 時間は、18時までを目途に

(10) 日本人らしいあなたへ

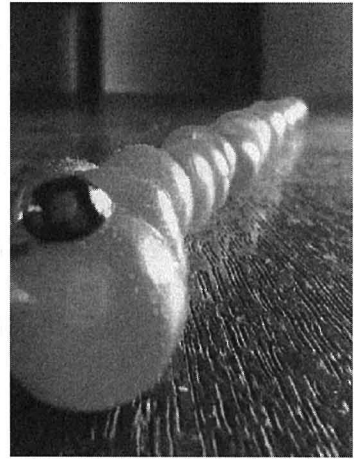
- 日本の子どもたち

「・・・していいですか？」

- アメリカ合衆国の子どもたち

「やってはいけない」と言われたこと以外は何をやってもいいのだと解釈

【受講生の作品】 すべて作者は異なる



2-2 第2回授業（'07. 6. 8.）

(1) 前回の課題作品の鑑賞

受講生全員分をプロジェクタで投影。

(2) アンディ・ゴールドズワージー (Andy Goldsworthy) の作品の鑑賞

(3) 写実的に描く

- モチーフ : 自分の手 (Hand の部分)
- ポーズ : 自由

●時間 : 10 分間

●観察して形を正確に描こう

(4) ちょっと待て！それは才能か？

①スポーツの世界では、「いつからでも、何歳からでも、一定の効果的トレーニングを積めば、上達は可能（町内運動会で活躍できる程度には）」というのが常識。

②では、美術の世界では…？

「美術がヘタ」「美術が苦手」それは、多くの場合

=本物そっくりには描けない

=見えたとおりに描けない

=写實的に描けない

=デッサンが苦手

③驚異の Before&After

B. エドワーズ『脳の右側で描け』（マール社、1981年）より図版提示。

約1ヶ月のトレーニングによって写實的描画能力が向上した実例。

(5) B. エドワーズの方法論に学ぶ

対象を見ないで概念で描いてしまうことを改善するには、「左脳を黙らせる」ことが必要である。以下のトレーニングはいずれも「左脳モードの出番を少なくし、右脳モードを活発に機能させること」を目的としている。

① 純粹輪郭画法

自分の手を見て支持体（紙）に描くが、モデルである手を一切見ないで、モデル（手）の輪郭を目でゆっくりと追い、視線の移動に合わせて鉛筆を動かして描く。支持体上でのズレは気にしない。絵が苦手な人は、見ているつもりでも見ていない。ここではしっかり見ること、および見ることと描くことの連動が大切。

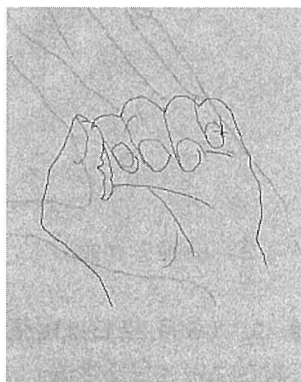
② 修正輪郭画法

純粹輪郭画と同じ描き方をするが、ここでは支持体上での線や形のズレを修正すべく、途中で鉛筆を止めて支持体上の描画を確認し、必要に応じて鉛筆の位置を修正して描画に戻る。

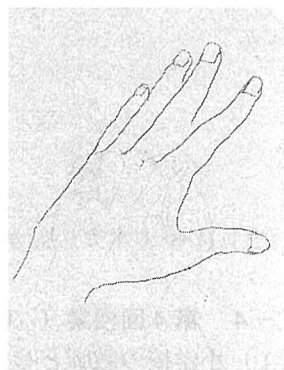
【受講生の作品】 同一人物による3点



(3) トレーニング前



(5) ①純粹輪郭画



(5) ②修正輪郭画

2-3 第3回授業 ('07. 6.15.)

(1) 前回までの復習

教育実習（基本実習、委託実習）で欠席した受講生のため。

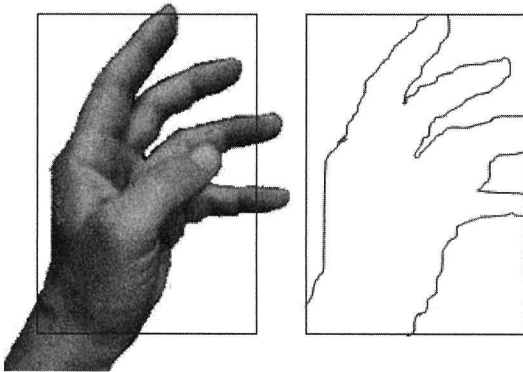
(2) スペースの形、ネガの形

「ルビンの壺」の図や他の多義図形から「図と地の関係」を学習。

① トレーニング1：

親指と中指（または人差し指）で輪を作り、輪の内側の形（ネガの形）だけをしっかりと見て描く。輪の形が描けたら、他の輪郭線を描いて手の形を完成させる。

② トレーニング2：



1) B4支持体の左半分に長方形を描き、その上にモチーフとなる手を置く。

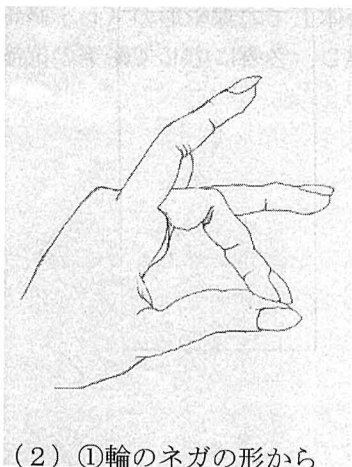
2) 画面右半分に左側と合同の長方形を描き、手の輪郭線と長方形とで出来るネガの形を見て描く。

3) 他の輪郭線を描き加えて完成させる。

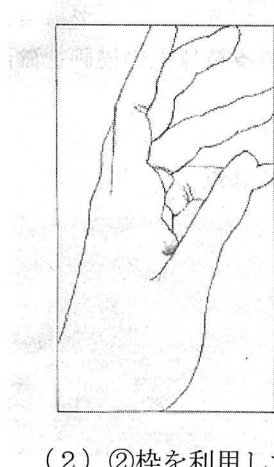
(3) 意味の剥奪：逆さ模写

ピカソによるドローイング（前掲書掲載）を逆さのまま模写する。

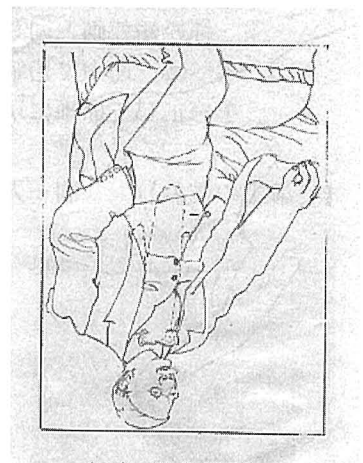
【受講生の作品】 同一人物による3点



(2) ①輪のネガの形から



(2) ②枠を利用して



(3) 逆さ模写

2-4 第4回授業 ('07. 6.29.) (6月22日は出張のため休講)

(1) 小学校の教師として知っておきたい「色彩理論」

(本来的には中学校までの学習の復習的な内容である)

①色の三要素（三属性） 明度・彩度・色相

②色相環

③絵の具の三原色、光の三原色

④暖色・寒色

⑤配色：類似・対照・補色

(2) 課題：「絵の具で遊ぼう」

①八つ切り画用紙3枚（売店にて1枚16円）

②裏に「所属」「氏名」を明記

③制作にとりかかる

④「多様な試み」：美しい部分が多くできるのがよい

⑤片づけまでが制作。きれいにして帰る。

(3) 課題遂行のためのヒント

①具象・抽象

②「描く」から離れる：「絵の具と筆で描く」のではなく…

③造形要素：色・形・テクスチャー（質感）

④レピティション：繰り返し

⑤グラデーション：色や形の段階的な変化

⑥点・線・面

⑦にじみ・ぼかし・たらしこみ

⑧かすれ

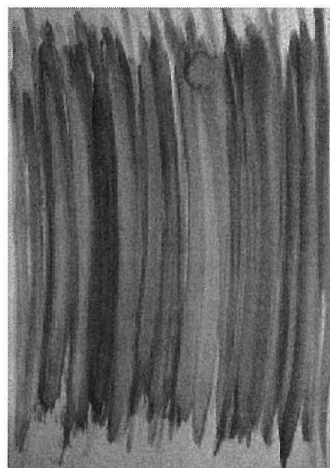
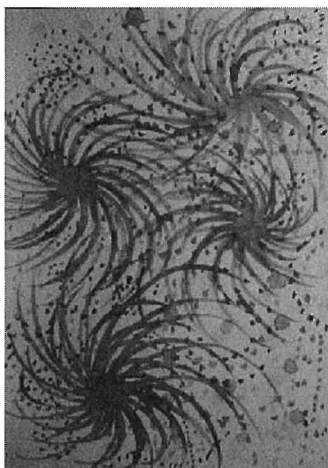
⑨混色

⑩重ね描き

(4) 次週予告

(5) 制作

【受講生の作品】 同一人物による3点



2-5 第5回授業（'07.7.6.）

(1) 小テスト：テスト前に過去4回の授業の復習

(2) 課題：「三原色で描く」

①透明水彩・不透明水彩

②●モチーフ：手と植物 できるだけ写実的に

●支持体：八つ切り画用紙1枚 横位置（横長）で使う

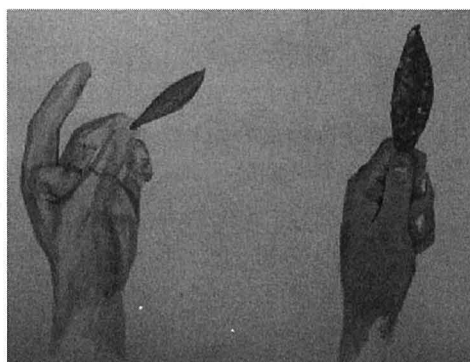
●画面右上に「所属」「氏名」

●画面左半分に「透明水彩（風）」、右半分に「不透明水彩（風）」

【受講生の作品】



女子学生の作品



男子学生の作品

2-6 反省と考察

第1回の課題「インスタレーション・写真・造形遊び」は、今年度初めて試みた内容である。携帯電話に内蔵されているデジタル・カメラで撮影をし、そのデータを携帯電話でパソコンへ送信するというメディア利用も含まれている。学生たちが小学生時代に体験したであろういわば古典的な図画工作科の活動のイメージを払拭する今日的な造形活動として構想し実践した。描画が苦手な学生でも手軽に取り組むことができ、発想トレーニングにもなる。来年度以降、しばらく続けて実践してみたい。また、表現と鑑賞の一体化をはかるべく、図画工作科の教科書にも掲載されているアンディ・ゴールズワージーの作品の鑑賞を組み込んだ。

B. エドワーズの方法論による写実的描画能力のトレーニングについては、これまでに何度も実践した方法であるにもかかわらず、今回は「純粹輪郭画」と「修正輪郭画」の要点を十分に押さえることができなかった。手の輪郭線に長い直線はほとんど存在しない。その変化をしっかりと見て、描画の線の変化として支持体に痕跡が残らなければこのトレーニングの意味がない。次年度は、説明と実演に十分な時間を取って理解を徹底させたい。

以前から自己の課題としていた「小テスト」の実施を今年度ようやく試みることができた。図画工作科に限らず、美術・造形教育においても知識・理解は大切である。しかし、従来、「情操教育」「個性尊重」「表現は自由」などの偏ったイメージによって、美術・造形教育においては知識・理解が軽んじられてきた。中学校美術科においては小テストや定期テストを実施すべきであると考えているが、実情を見ると、実施していない中学校や美術教師は少なくない。小学校図画工作科においては、テスト形式で知識・理解を確認・評価することはほとんどない。これらの実態から、大学生の多くは「図工・美術に知識・理解

は無縁」だと考えている。日本の図工・美術教育の充実をはかるには、教員免許状を取得する学生に「図工・美術にも知識・理解が必要」という認識を持ってもらわなければならない。もちろん、知識・理解と言っても、やみくもに形骸化した知識の断片を詰め込むのではなく、表現活動や鑑賞活動の前に身につけておくべき知識・理解もあれば、活動を通して身につけていく知識・理解もある。子どもたちに体験的理解をさせるためには、まず教師自身が学習内容を体験的に理解していなければならない。

今年度は、昨年以上に「パソコンとプロジェクタによる情報提示」に力を入れた。時間を有効に活用し、より効果的に情報を提示することが、学習者の興味・関心を高め、理解を深めることにつながる。次年度以降、手元のファイルを改善し、さらに充実したプレゼンテーションを行っていきたい。

※後半を別稿「初等教育教員養成における教科専門科目（図画工作科）の授業（２）

— 2007年度『初等科図画工作』の実践 —」において述べる。